



# 生えちやってますね あたし達!

杏さやふたなり合同誌

⚙️ ♀️ ⓔ Ⓜ️  
PUELLA MAGI  
MADOKA MAGICA  
KYOKO&SAYAKA FANBOOK







**Attention!**

**この本は  
杏子とさやかの  
ふたなり本です**

※禁複製・禁アップロード  
※18歳未満の方は読んではいけません。

04-13 くみちよ二

14-23 黒雲鶴

24-33 H'

34-37 ほなみ

38-45 Katzeh

48-55 謎のザウ

56-61 足田

62-70 鍵屋

72-85 ザウめき

86-103 ひかち

104-117 きもあせり

118 Carmine



はえてるっ！



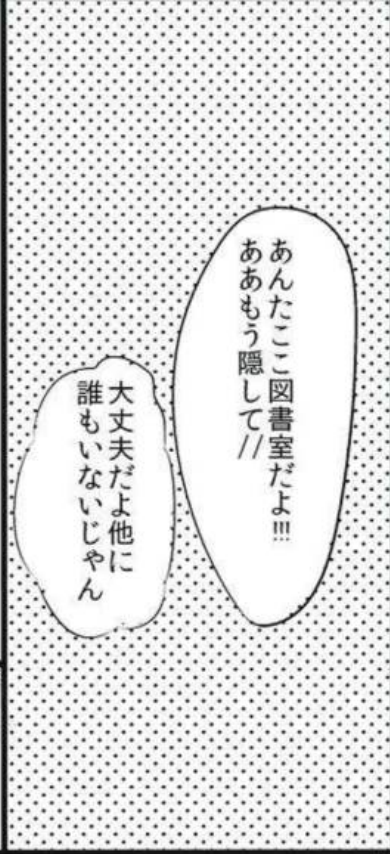


ぐみちよ二

















あ...あ...

ヒン



あ...あ...



あ...あ...

!?



あ...あ...

さやかあ...  
そこはだめ...



杏子  
きもちい...

あ...



あ...

ん



あ...



ビクッ

あ...

あ...

あ...

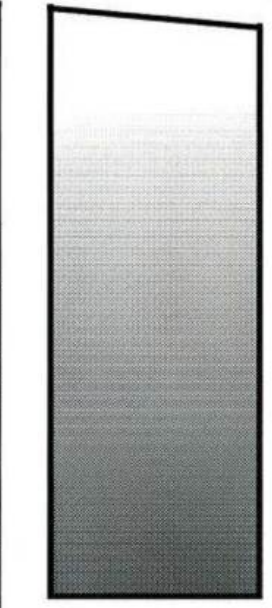
あ...  
さやかあ...

あ...









END☆





お誘いありがとうございました…！

えろまんが童貞を杏さやに  
捧げられて幸せです。  
しかもふたなり…！ふたなり！

公共の場でも周りの目を気にせず  
にいちやいちゃする二人が好きです。

杏さや幸せになれええ…！！

ぐみちよこ

ぐみちよこ ●七色ぱーかー <http://93choco.net/>



黑雲鵠





これが当たり前の  
ルールでしょ、  
そういう強さの  
順番なんだから

※注:この漫画の魔法少女はち○ぽを武器に魔女を倒す設定です。









…ふん、  
トーシロが。  
ちつとは亀頭  
冷やせつての  
早すぎだし



彼女は癒しの祈りを  
契約にして魔法少女に  
なったからね



…おつかしいなあ、  
3日は勃たない  
くらいにはかまして  
やったんだけどなあ？



うぜえ…  
超うぜえ！



誰が…あんななんかに。  
あんたみたいなの  
奴がいるから、  
マミさんは…!!



精力の回復力は  
人一倍だ













：言っ  
て聞か  
せて  
わか  
らね  
え、

シコッ  
ても  
わか  
らね  
え  
バカ  
とな  
りや  
あ…

アア  
アア



後  
は強  
お  
姦  
か  
し  
ち  
や  
う  
し  
か  
な  
い  
よ  
ね  
ッ  
!?  
♡

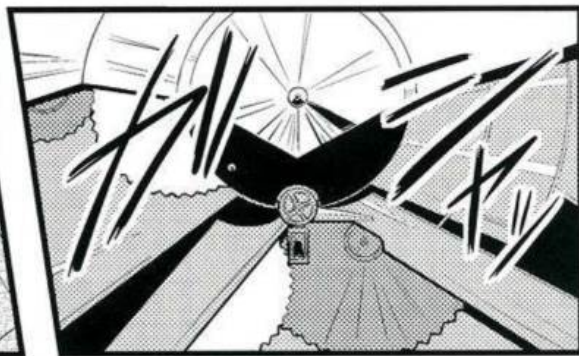
ん

ちゅっ♡









カッパッ



終わる



杏さやふたなり合同なのにほむらオチですいませんでした

どうも黒雲鶴です。

個人誌で「ふたなり魔法少女が擬人化魔女をち○こで倒す」というイミフなシリーズを描いているんですが、今回は杏さやふたなり合同という事でそっちで描かなかった番外編を描かせて頂きました。5話の会話をアホな内容に置換したかっただけでs

今回はお誘い頂きありがとうございました!



黒雲鶴

●Atelier:Dew <http://www.pixiv.net/member.php?id=10478>



H'









むんっ!  
むう!?



えっ  
ちよっ!?

がーばっ



じ…実は…



ば…馬鹿!  
何…考え  
て…だ  
お前!!

ドキ  
ドキ



するっ





こいつ生えてる  
じゃねえか!!



魔法でこれ  
生やしたら...

なんだか杏子が  
可愛く見えて  
きちゃって



そういうわけで  
ちよっとだけ!  
ちよっとだけ!!

わけがわからない!

かば  
かば



大丈夫!  
ちよっと  
見るだけ!!

何が大じよ

あ!!

ばかばか!  
脱がすな!!

♡♡♡



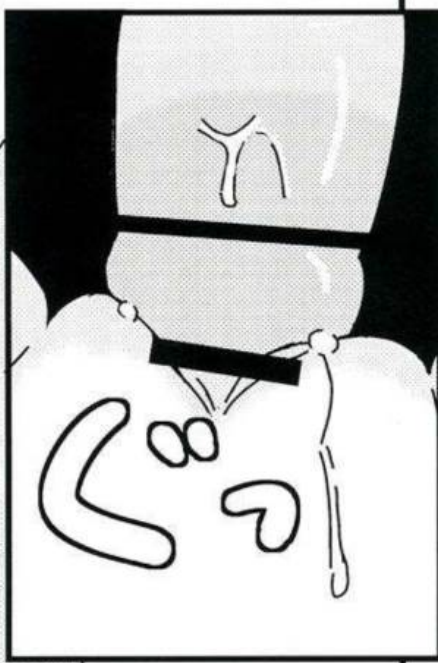






あ...あ...あ...

グッ  
みちみち



ぷきぷき



ん？

ははは



きよ、杏子のなか

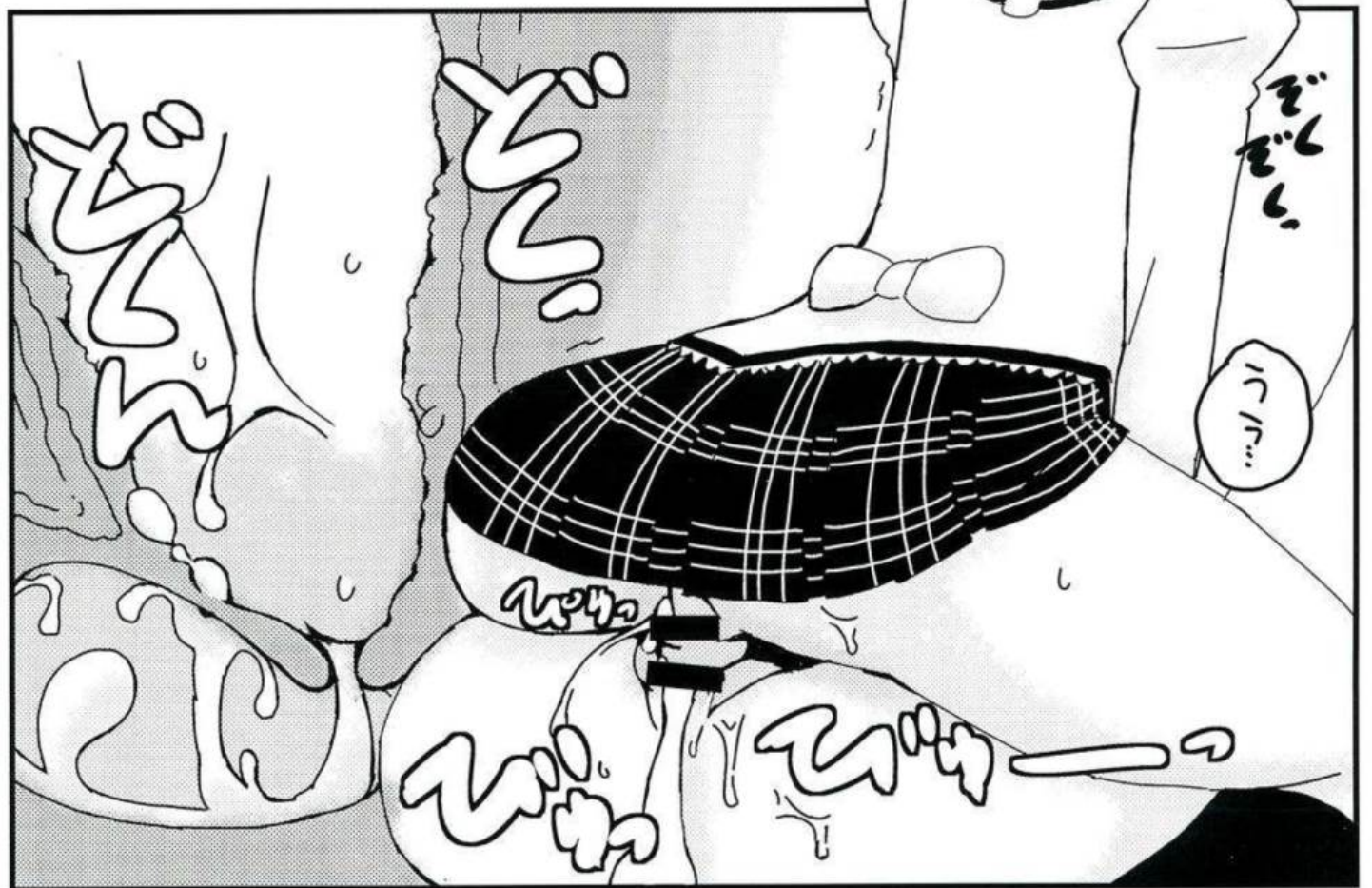
ははは

ぬるぬるで  
きつきつで  
あつたかくて  
気持よすぎだよお













…なにやってんだろ…  
もう馬鹿すぎて…  
あやまって済むような  
ことじゃないけど…  
杏子…ほんとごめん…



あたしって…  
ほんとバカ…



い…いやさ  
ほら、そ、そこまで  
気にしてないって  
だからもう  
元気だせよ

ここまで  
落ち込まれると  
怒りたくても  
怒れない  
じゃねえかよ…



泣きたいの  
はこつちだ…



……



エロ漫画初めて描いたけど難しかった…!  
でも色々妄想しながら楽しく描けたよ!!

自分一人じゃ完成しなかった!!  
煮詰まってる時とかみんな協力してくれたり…!  
みんな優しい!ありがとう!!  
そして誘ってくれたきもおさん、本当にありがとう!!

PIXIV : 257603  
Twitter: HentaiOfHDash



つぎがあったら  
きょうこちゃんに  
ぶっかけたり  
のませたりしたい。

H'

●即H <http://www.pixiv.net/member.php?id=2527603>



ほなみ



# さやがちゃんに 生えました。

ほなみ



どうしよう  
こんなの  
超気持ち  
悪い...

ちらっ

とかいつつ  
さつきから  
よく見てる  
よな

ちらっ



なみてっ!  
あんなは  
観かない  
でよ!

あんなは  
観かない  
でよ!



まあ  
心配しなくても  
そのうち  
消えるって

なにその  
根拠無い  
慰め!  
いつかって  
いつよ!

いつかって  
いつよ!







「...」  
ごめんなさい!!!  
ふたなり好きです  
ほなみ ◡ ◡ ◡



ほなみ ●ヨツク□ <http://4296.blog79.fc2.com/>



Katzeh





大したことない  
魔女だったねえ

あれ少し怪我してる  
じゃない杏子治すよ

おっと…  
わるいね

はあ



さやか…  
いいにおい…

あめあめ

ひゅん

ひゅん

びん

“あくまのしっぽ” Katzeh



な…コレ…っ  
尻尾っつか  
…っ!



えっ?なに?  
尻尾…!?  
これって…!

君達の生存種族維持本能が常に  
危機に身を置くことにより  
潜在意識下で高まりに高まり  
本来交尾不可能でありながら  
自分に相応しいと考える対象に  
直接的に生殖するための形を  
具現化しその肉体を歪めていく  
魔法として顕在化したとしても  
驚くには値しないというかその  
生え方はなんでもかまっても  
もつと下品なのが本当は好ま  
きなんだろう君達はわかっ  
るんだぞこの下劣な種族めわ  
からないよやりなおせばかま  
んときたら大切なときにかま  
達とんでもない愚図をやら









…杏子になら  
別にいーよ……

ずっと一緒に  
戦ってくれた  
んだもん……

やつ……  
勝手に……

は……

は……

………杏子  
あたしと……  
したいんだ……？

ん……

ひ……

あ……

は……

……ひやあほれは  
なんらのあーッ！

か……

む……

つあんたの魔法の  
せーなんだ……  
したいのはあんたの  
ほーじゃないのお？

あ……





なつ...  
なにさあつ...!

あんだだつて  
こんな  
してえ...っ!

うわっ

うわっ





だめ...っこれえ...っ♡  
杏子のっ...おく...までえっ♡

はあ...あ♡さやか...っ♡  
熱っ...いっいっ...っ♡









KatzeH

●FelisOvum <http://katzeH.fur.bz/>







謎のザコ

足田

鍵屋



「え？ 風邪？」

「うん。さやかちゃん、そう言ってたよ」

その日の朝、まどか達が普段通る通学路に顔を出した杏子は、目的の青い髪の少女を見つける事が出来なかった。その理由を彼女の親友に尋ねてみた所、どうやら季節外れの風邪だという話だった。

「全くしょうがないヤツだな。何とかは風邪引かないんじゃないかなかったのか？」

「あはは……それはちよつと違うと思うな、杏子ちゃん……」

杏子の呆れた様な台詞に、思わず苦笑いをするまどか。

「……仕方ないねえ。せつかくだから冷やかしにでも行ってやるか。間の抜けた寝顔でも見てきてやるよ」

「うん、杏子ちゃん。さやかちゃんのお見舞い、よろしくね？」

「な——いや、そんな、見舞いじゃねーって。あたしはただ……」

「きつとさやかちゃんの事だから、初めは意地張つちやうかもしれないけど……杏子ちゃんの事話してるさやかちゃん、いつも楽しそうなもの。きつと、喜んでくれるよ？」

まどかに上目遣いで見上げられ、杏子はやれやれと息を吐いた。さやかもきつと、まどかのこんな仕草に弱いんだろーうなと思いつつ、杏子はまどかの頭をくしやりと撫でる。

「分かったよ。土産の一つでもせしめて帰ってくるからさ。ま、気長に待っててくれよな」

「うん。がんばってね、杏子ちゃん」

まどかの声援を背に受け、杏子は振り返らずに手を振る。そして、目的のさやかの家へと足を運んだ。

「おーい、さやかー」

コンコンとさやかの部屋の窓を叩く杏子。しかし、中からの反応は無い。不思議に思った杏子が少し窓を強めに叩くと、カーテンが少しだけ開いて、そこから少し暗い顔をしたさやかが顔を覗かせていた。

「……杏子？ どうしたの、こんな時間に」

「どうしたの、じゃねーよ。まどかの奴に、さやかが風邪引いたって聞いたからさ、見に来てやったんだよ」

決して「見舞いに来た」とは言わないものの、杏子の表情は今にもさやかが心配だと言いたそうな表情をしている。

「そんな、わざわざお見舞いに来なくても良かったのに。あんたにうつしちゃ、悪いでしょうが」

「何だよ、そんな事気にすんなって。あたしは人から風邪を貰うほどヤワじゃないよ」

しかし、当のさやか本人は、どうも杏子を部屋の中に入れてくれない様子だった。ここまできて何もせずに帰りに帰らなくなった杏子は、窓に手をかけて入れてくれる様、さやかに促す。

「だからさ、入れてくれよさやか。ほら、リング持ってきたんだ。食べるだろう？」

「……いいわよ。そこ、置いといて。後でちゃんと食べるから」

「さやか……？」

取り付く島も無く、カーテンが音を立てて閉められる。呆気に取られる杏子だったが、やがて、このまま引き下がるものかと行動を開始した。





「お邪魔しまーす」

小声で玄関のドアを開け、ゆっくりと家の中に入る。さやかは失念していた様だが、杏子は以前さやかに自分の家の合鍵を渡していたのだ。油断大敵だぜ、と呟いて、杏子はさやかの部屋まで向かう。そして、さやかの部屋のドアノブに手をかけた時——奇妙な声を聞いた。

「……………あっ——はっ……………」

「……………さやか？」

部屋の中から聞こえてくる、苦しそうなさやかの声。まさか、さやかの調子は自分が思っていたよりも悪いのではないか。嫌な予感がして、杏子は急いでドアを開ける。

「さやかっ！ 大丈夫かっ!」

「——えっ……………？ あ、杏、子……………!」

「……………え？ さや、か……………?」

さやかの部屋に入り、杏子が最初に目にした光景。それは、パジャマをはだけさせて、自分の胸を揉みながら、その股間に備わっている——普通に考えて、少女には在り得ない筈の肉の器官——男性器を扱っているさやかの姿だった。

「……………」

「……………」

呆然と、二人は目を合わせる。その沈黙を破る様に、びゆる、と弧を描いて肉棒の先端から白濁液が噴き出していた。



「……………それで？ 軽く風邪を引いたからソウルジエム弄って身体強化で治そ

うとしたらちよっと加減を間違って、したらそんなモノが生えてきて、収まりがつかなかったから自分で慰めていた——と、こういう訳だな？」

「……………」

風邪の熱ではない理由で、さやかは顔を真っ赤にしながら、自分の身におきた異変を杏子に白状した。そっけない態度で杏子を追い返そうとしたのも、今の自分の状態を見られなくなかったから、とも言った。

「……………まあ、特別具合が悪いっていうんじゃないよ……けど」

「な、何よ……………」

杏子は、一度さやかの身体を上から下まで眺めた後に、ぼつりと呟いた。

「……………まさか、魔法でそんな事も出来るなんて思わなかったよ」

「あ……………あたしだって、こんな事になるなんて思いもしなかったわよ!」

感心した様な、呆れた様な杏子の言葉に、さやかは大声で反論する。その股間には、未だに屹立した男性器があった。

「できあ……………ソレ、いつ治る訳？」

「わ、分かんないわよ……………とりあえず出せば収まるかなって思って、もう朝から何回もしてるのに……………全然収まらないのよお……………」

「ま、マジかよ……………?」

「どうしよう、杏子……………もしこのまま治らなかつたら、あたしもう学校に行けないよ……………」

涙目で、さやかは杏子に訴える。

「お、落ち着けよさやか……………ソウルジエムが原因なら、それをどうにかすれば元に戻るんじゃないか？」

「……………やってみただけど、駄目だった。逆に、どんどん元気になっちゃって……………」

そう言っ、さやかは股間に目を落とす。そこには、本人の意志などお構



い無しと言わんばかりに、肉棒が自己主張をしていた。

「う——やだ、ちょっと、あんまりじっくり見ないでよ、杏子……」

「あ、わ、悪い……でも……」

——おもむろに、杏子の手が伸びる。

「ひゃっ!! ちょよ、ちょっと、何触ってんのよ……!!」

肉棒に杏子の手が触れる感触に、さやかの声が裏返った。一方の杏子は、肉棒を興味津々とばかりに見つめている。

「治し方が分かんねーなら……とりあえず枯れるまで出すしかないよな……」

「え、ちょよ、あんた何変な事——んんっ!!」

くちゅ、と既に鈴口から零れ出していた粘液が、陰茎を握った杏子の指に絡みついて音を立てる。それを潤滑液に、杏子はさやかの肉棒を扱き始めた。

「きよ……こ……だめっ、やめてっ……ふあっ……!」

制止の声も、不意に背筋を駆け上る快感に途切れる。羞恥に震える喘ぎも、肉棒を更に硬直させるスパイスにしかない。

「さやかの……すげえ熱い……男のやつって、こうなるんだな……」

「っあっ……! それ以上、したらっ、ああっ……!」

さやかが身体を仰げ反らせると同時に、肉棒の先端から勢い良く白濁液が飛び散る。その飛沫は杏子の顔を白く染め、零れ落ちてシーツを汚した。

「うわっ……と、も、もう出たのかよ……」

「し、仕方ないでしょ……! 何だか知らないけど、すっごく敏感なんだから、コレ……!」

「で、それでも収まらない、か。なるほど……確かにこれは、厄介だな……」

杏子は自分の顔に付いた白濁を指ですくい、ぺろりと舐め取る。その仕草

に、さやかは再び肉棒が反応し始めた事に気付いた。

「はっ……ん、もお、やあ……」

射精した後の気だるさにも関わらず、じわりと身体中に拡がってゆく勃起の快感。それに、さやかの女の部分も反応してしまい、さやかは思わず身を震わせる。

「まだ足りないのか……? さやか……」

「えっ……や、そういう訳じゃ……」

その事を杏子に見透かされた様に感じて、さやかは顔を赤くしながら懸命に否定しようとした——が、その時、杏子の顔が鼻先まで迫っていて。

「さやか」

「んっ——!?!」

その唇を奪われた。その次に、ぬるりとした感触。それが杏子の舌だと分かった時には、それはさやかの口内に蛇の様に侵入していた。

「ん、むう、ふうっ、んっ……!」

「んっ、ちゅっ、ちゅる……」

ゆっくりとベッドに押し倒されながら、さやかは杏子の舌を味わう。と、そこにどろりとした苦味のある感触。それが、杏子が舐め取った、自分の吐き出した白濁液だと気付くまで、しばらく時間がかかった。

「んう……んっ、んぐ——」

「ふうっ……ちゅ、ちゅぶ……」

口内を舐られ、唾液と精液のカクテルを口移しで飲まされる。普段なら経験出来ないであろうその行為に、さやかは身体が熱くなっていくのを感じた。

「……つぶあ……き、杏子お……」

「ンッ——はあっ、さやか……」

濃密な口付けに、さやかの肉棒は痛い程に反応している。今まで必死に隠



そうとしてきたさやか自身の情欲も、抑え切れない程に疼いている。

「我慢すんなよ、さやか」

そんなさやかの状態を見透かすかの様な、杏子の言葉。

「あたしが全部受け止めてやるよ。どんな身体になっても、さやかはさやかだ」

「杏子……」

そう言つて微笑んだ杏子は、自分の服を脱ぎ始める。さやかもそれに倣う様に、パジャマのボタンに手をかけた――



「んっ、んふっ、ちゆるっ、じゅぶっ……!」

「ふああっ! あっ! ああんっ! ひあっ……!」

じゆるじゆると音を立てて、さやかの肉棒に杏子の唇が吸い付く。舌先で亀頭を舐め、唇で陰茎を扱き、精を搾りつくさんとばかりにしゃぶりついている。

「んあっ、ああっ……!!」

どくん、と杏子の口内で白濁液が爆ぜる。その勢いは一瞬で杏子の口内を満たし、唇の端から漏れ出す程。それを零すまいと、杏子は喉を鳴らして呑み込んでゆく。

「んぐっ……ふうっ——んふ——ん——」

息苦しさに、杏子が肉棒から唇を離す。幾度目の射精を終えてなお剛直を保つそれは、自らの放った白濁でどろどろに汚れていた。

「はあ……んくっ……あふう……」

口一杯に白濁を頬張り、呆けた様な顔で、杏子は精液を嚙下してゆく。そ

の、普段は決して見る事が出来ないであろう杏子の表情に、さやかの劣情は刺激される。

「杏子っ……!」

「んっ、ふぐうっ……!!」

呆然とする杏子の頭を押さえ、肉棒を咥えさせる。今度は自分から腰を振り、杏子の喉奥まで犯すように肉棒を突き挿れる。

「んっ! んぐっ! ふううっ……!」

「ああっ、杏子おっ! すごいつ、気持ちいいよおっ!」

杏子もまた、さやかの肉棒を受け止めようと唇で吸い付く。じゅぶっ、じゆるっ、と卑猥な音を立てながら、さやかは杏子の口内に何度も精を放った。

「んっ……さやかの……いっぱい……」

「はあっ……ああっ……杏子お……」

口いっぱいに広がるさやかの精の臭気。汗だくになった杏子の身体から立ち上る少女の香り。それぞれのフェロモンに中てられた様に、二人は互いの身体を求め合う。

「さやか……来て……」

「杏子……いくよ……」

すっかり塗れそぼった秘唇を指で開き、杏子はさやかを誘う。断る理由など無く、さやかは杏子の入口に肉棒を宛がい、一息に突き挿れた

「——ッッ!!」

「はあっ……! う、ううっ……!」

乙女の聖域を掻き分けて、欲望の塊が侵入する。その衝撃に、杏子は声を引きつらせた。

「っあ、はあっ……杏子……平気……?」



「っ、く……少し、痛い、けど……こんな、魔女との戦いに比べればなんて事無い、さ……」

「……そんな顔して、あんまり説得力無いよ？」

太股に流れ出た一筋の赤色を見て、さやかは杏子の目尻に浮かんだ涙を指でそっと拭う。その事を指摘された杏子は、顔を真っ赤にして俯いた。

「……ばか。あんまり、見るな」

「はいはい——それじゃ、動くからね」

我慢出来ない、と言わんばかりに脈動している肉棒を、さやかはゆっくりと動かし始める。ざらりとして、それでいて熱くぬめる様な感觸の肉襞の刺激に、少しの抽送だけで達してしまいそうな快感が、さやかの全身を駆けた。

「あっ……くうっ……！」

「っうあっ……！ 杏子の中、すご、いっ……！」

ぬちり、と肉の絡み合う音が身体の中で響く。もう、二人の性器はその意志を離れて本能だけで交じり合おうとしていた。

「やっ、だ……もうっ……！」

「ああっ、さやかあっ……！」

蠕動する膣肉の誘惑に耐え切れず、肉棒はその中に精を放った。抱きしめ合いながら二人は身体を震わせ、互いを受け止める。

「ああっ、あっ……ふう——」

「ああんっ……熱、いい……」

下腹部に広がる熱を、杏子は恍惚とした表情で受け止める。と、身体に感じる重みが増えた様な気がして、さやかの身体を持ってみた。

「さやか？」

「……」

呼びかけてみても、その反応は無い。どうやら、何度も射精した影響か、

軽く意識を失ってしまったようだ。

「まったく、しょうがないな……」

杏子はそう呟いてみるものの、その原因は手や口を使って散々搾り取ってきた自分にも責任はあると考え、さやかを責める事はしなかった。

「……しかし。どうするかな、これ」

一人ごちて、ベッドの周りを見渡す。そこは、さやかの撒き散らした白濁液やら何やらで、シーツやパジャマ、自分の服など色々汚れていた。

流石にこれを放置するのはまずいだろう——杏子はそう考え、さやかの身体を抱きかかえると、ある場所に向かっていった。



「——ん……あれ……？」

温かい感觸と、水の音でさやかはゆっくりと目を覚ます。まだ少しはつきりしない頭で周りを見渡すと、そこは見慣れた——自分の家のバスルームだった。

「お、起きたかねぼすけさん」

声のする方に目を向けると、自分の正面に立ってシャワーヘッドをこちらに向けている杏子の姿があった。シャワーヘッドからは温かいお湯が出て、さやかの身体の汚れを洗い流している。

「……あたし、どうして。なんで、ここに」

「ちょっと出しすぎたみたいだな。いきなり気絶するから、びっくりしたよ」

「あ……うん、そうだね……杏子の中、すごい気持ちよかった」

「そ——そうかい？ いや、何か、照れるって……ハハ」



さやか言葉に、杏子は照れ臭そうに笑う。そして。

「じゃあ」

さやかの目の前に、『それ』を近付ける。

「あたしのも、良くしてくれるかい？」

「へ？」

それを見て、さやかは目を丸くした。杏子の股間から生えているそれは、間違いなく自分から生えているモノと同じモノ。

「杏子……？ あんた、それ……何で……！」

「ちよつと加減が難しかったけどさ、何とか出来たよ。……これで、さやかと同じ、だな」

「でも……何で、わざわざそんな事……！」

杏子の行動に、さやかは疑問をぶつける。それに、杏子はこう答えた。

「……これでさやかと同じ身体になれたんだ。同情じゃない。さやかがあたしを抱いてくれた時、すごく幸せな気持ちになれたんだよ。……だから、あたしもさやかに同じ事したいって思った……もしかして、嫌だったか……？」

そう言つて、さやかを抱きしめる。その優しい声に、さやかは胸にこみ上げるものを感じて、杏子を抱きしめ返した。

「ばか……杏子、そんな事、そんな状態で言つても締まらないってば……」

苦笑するさやかの下腹部に当たる、杏子の滾った肉棒。それに気付いた杏子は、しまったという顔をする。

「あー……何だ、うん。さやかの気持ち、よく分かったよ。コレ、ほんとに取まんないもんなんだな……」

「でしょ？ だから……」

今度は、さやかの方から唇を奪う。

「二人で……一緒にしよ……？ 杏子……」

その提案を、杏子が断れるはずも無かった。



「んっ、んむっ、ふうんっ、ちゅっ……」

「はむっ、んうっ、ちゆるっ、くちゅっ……」

絡み合う舌と唾液の音が、バスルームに反響する。深い口付けを交わしながら、二人は腰を動かして、互いの肉棒同士を擦り合わせていた。

「あっ、んっ、くふっ、ちゅっ……」

「んあっ、ふうんっ、びちゅっ、んんっ……」

ちゅぶ、ちゅぶ、と口端から零れる唾液が泡立つ音に、にちゃにちゃと鈴口から溢れる淫水の絡み合う音、くぐもった嬌声に、ぼたぼたと秘裂から垂れ落ちる蜜の音。潤んだ瞳で互いの蕩けた顔を見て、洗い流してもなお汗ばむ肌の匂い。柔らかく、熱い肌が触れ合う。互いの存在を全身で感じながら、二人は行為に没頭した。

「んーっ……ふあっ、じゆる……んっ……！」

「んくっ、ふうっ……ちゅぶ、ん、じゅっ……！」

二人は腰の動きを速めながら、肉棒同士で抜き合った。淫水にまみれた陰茎で擦り合い、鈴口でキスを交わす。裏筋を亀頭のかさで弄くる。やがて限界を迎えて噴出した白濁液をお腹で受け止め、更にそれをローションの様に互いの肌に塗り込んでゆく。

「あっ……さやか……さやかあ……」

「んあ……杏子……きょうこお……」

何度目かの射精で、腰が抜けた様に二人はバスマットの上へへたり込む。



が、それでもなお二人は離れる事を止めない。

「して……杏子お……あたしにも、杏子のちようだい……？」

「ああ……分かつてるよ……さやかをあたしでいっぱいにしてやる……！」

ねだる様な声で、さやかは杏子の肉棒を自身の秘裂に宛がう。それを心待ちにしていた、とばかりに、杏子は遠慮無くさやかの中に腰を突き挿れた。

「ンッ、あっ——！！」

「ああっ、さ、さやかあっ……！！」

融けた肉襲の中にずるずると侵入する肉棒。それだけで射精したくなる程の刺激に、杏子は歯を食いしばって耐える。

「んっ……そんな、痛く、ないから……動いても大丈夫だよ、杏子……」

「いやっ……ちよつと、やばっ、さやかの中、気持ちよすぎて、これ以上動かしたら出ちやうって……！」

「……いいよ、杏子。何回でも、あたしの中に出して……？」

「うっ……あっ、さやかっ……！」

「ふあうっ……！！」

さやかの言葉をきっかけに、杏子の肉棒が弾ける。どくっ、どくっ、と力強い脈動に合わせて、さやかの膣内を白濁で満たしていった。

「あっ……すごい……杏子の……いっぱい……」

結合部から溢れる白濁に、僅かに混じる赤い色。さやかはそれを指で掬って、杏子の目の前に差し出して見せる。

「ほら……これが、あたしの初めてだよ？ こっちも、杏子にあげるね？」

「はあっ……あっ、さやかっ……んっ、ちゅぶ……」

精液を掬った指を、そっと杏子の口内へ差し入れる。それを受け入れる様に、杏子はさやかの指を丁寧に舐め回した。

「あはっ……杏子、可愛い……」

「んっ……変な事、言うなよ……ちゆるる……」

「美味しそうに指を舐めながらそんな事言っても、あまり説得力が無いわよ？」

「んっ……べろっ……だって、もったいない、だろ……」

「あっ、んっ……もう、杏子ったらあ……」

さやかの指をしゃぶりながらも、杏子はさやかの身体を押し倒していった。つう、と唾液の橋を残して口を話すと、杏子は自分の肉棒がさやかの目の前に来る様に体勢を変えて、さやかの上に覆い被さる。

「一緒に——な、さやか……」

「……うん、分かった。杏子」

杏子が何を言わんとしているかを察したさやかは、目の前にぶらさがる杏子の肉棒を一息に頬張った。

「あふっ！ んん——」

同時に、自身の肉棒を包む温かい杏子の口内の感触。互いのモノを口に咥え、二人はそれを愛おしそうに吸い始めた。

「んっ……ふっ……ちゆるっ、じゆるっ……」

「ふうっ……べろっ……じゅぶ、んっ、じゅ……」

口淫と同時に濡れそぼった秘唇を指で弄くる。とろとろと溢れる蜜を指で泡立てながら、男と女、二つの快感を同時に味わう。

「あふっ……！ んあっ、くちゅっ、んふうっ……ふううううんっ……！！」

「ひふうっ……！ ふあっ、んぶっ、じゆるっ、くううううんっ……！！」

押し寄せる絶頂に、二人は堪らず肉棒を震わせ射精し、秘唇を戦慄かせて潮を噴く。顔を口内をどろどろに汚されても、二人はその行為に没頭してゆく。



「はひっ……ふあっ……あああ……」

「へ……ああ……んああああ……」

ぼろぼろと歓喜の涙を流しながら、二人は互いの身体を味わい続けた――



「あっ、ああっ、杏子っ！ きょうこおっ！」

「さやかっ！ さやかっ！ さやかあっ……！」

ぱんっ、ぱんっ、と腰を打ち付ける音がバスルームに響く。後ろを向いて壁に手を付き、腰を突き出した形のさやかを、杏子は背後から突き続ける。一突きする度に、びゅる、びゅる、とさやかの肉棒から白濁液が噴出する。幾度と無く膣内に放出された白濁液が結合部からこぼれと溢れ、糸を引いていた。

「あーっ……！ いっ、さやかあっ……！ きもちいいよおっ……！」

「あたしもっ、杏子っ……また、でちゃうっ……！」

バスマットの上に寝転び、杏子を上から突き上げるさやか。アーチを描いて噴き出した杏子の白濁液を全身に浴びながら、さやかも負けじと杏子の膣内に射精する。

手で、口で、胸で、肉棒で、膣で――あらゆる場所を使い、二人は何度も慰め合い、達し合い、口付け合い、抱き合い、愛し合った。

「さやかっ……さやかあっ――！！」

「杏子っ……きょうこおっ――！！」

身体と意識が全て、真っ白に染め上げられる。その最後まで、二人は互い

の名前を呼び続けた――



「……ねえ、杏子？」

「ん？ 何ださやか」

それから。散々搾り尽してようやく収まりを見せた二人の肉棒だったが、完全に元の身体に戻る事は無かった。そして、あれだけの事をしたのだから当然だが、疲労困憊の二人は、同じベッドで眠る事にした。

「この身体……元に戻ると思う？」

「……さあね。また明日から色々調べてみるさ」

とりあえず、今は眠りたいんだとばかりに、杏子は布団を頭から被る。と、何かを思い出したかの様に急にその頭を出した。

「もし――二度と戻らなくても」

「え？」

「この身体のままでも、構わない。さやかと同じなら、それでいい」

「杏子……」

杏子の言葉を聞いたさやかは、布団の中で杏子に抱き付いた。

「……ありがと。杏子」

「気にすんなよ、さやか」

さやかの身体を、杏子が抱きしめ返す。伝わる互いの温もりが、疲れた身体に心地良い。

そっと目を閉じて、まじろみにたゆたう。この腕の中にある存在を決して離さないと誓いながら、二人は安らぎの中へと意識を落とす。



「さいしよはぐー！」

「じゃん、けん、ぼいっ！」

杏子とさやかは真剣な顔で睨み合う。ベッドに腰掛けた二人は談笑するでもなく、かといって眠りにつくわけでもない。辺りには張り詰めた空気が漂っていた。視線の先にはお互いの手、正確には指の形。

「あいこで、しよ！」

部屋に響く声。今にも魔獣を殺しかねないほどの鋭い目つき。幾千もの戦いの末鍛えられた、しかし少女の細い可憐な腕がふりあげられる。彼女たちの友人がこんな様子を見たら、何事かとすぐ止めに入るだろう。しかしいつも喧嘩でも、本気で憎み争っているわけでもない。

なんてことはない。単に今夜はどちらが上か下になるかを、決めているだけだった。これはお互い譲らない杏子とさやかの、妥協に妥協を重ねた結果の平和的解決方法だった。

「っしやー！」

そして勝負は一瞬で終わる。杏子はこぶしをかかげ天を仰いだ。その大きな勝利を喜ぶポーズは、雪辱の三連敗からついに脱した証だった。

「長かったあ……。あ、今日は生やすから」

言うが早いか行動が早い。杏子は早速準備に取り掛かる。生やす。本来女性には備わっていないモノを、取り付けること。準備と言っても魔法を使うだけで、あとは時間がたてば男性器が生えてくる。なんとも便利なものだった。

「ちよいまち」

そんな杏子のすばやい行動を見て、さやかが慌てて止めに入る。

「あんたね……生やすとか聞いてないって」

「言ったじゃん、さつき。……まあまあさやかさ、よっと」

杏子は両手でなだめるような手つきをしたかと思うと、そのままさやかをベッドに倒した。突然ひっくり返されたさやかは目を丸くして抗議する。

「ちよ、なにすんのよ！」

「んーでも、さやかは負けたから。あたしの言うこと聞くべきじゃないの」どこか勝ち誇った笑みを浮かべながら、杏子はさやかの上に乗しかかった。諦めたようにため息をつくさやか。だけどどこか頬が緩んでいるように見えるのは、きつと気のせいじゃない。ふたりの重みで、ベッドがぎしりと音を立てた。

気が付けばベッドに押し倒されたさやかは、あれよあれよという間に服を脱がされていた。初めてのときは見滝原の制服の構造に頭を抱え、半泣きで脱ぐよう頼んできたのに。ぼんやりと考えるさやかを尻目に、杏子は慣れた手つきで脱がせ終え、自身も下着姿になろうとしている。こんなことで時間の経過を実感するなんて、とさやかは頭を抱えなくなった。

「……なに考えてんの」

「なんだと思う？」

「どうせろくでもないことだろ……」

「うっわひど。じゃあ教えてあげない」

「べ、別に教えてほしくないし」

「あ、今はやりのツンデレってやつ？」

「……わけわかんねーよ」

杏子のため息をつくとき、おしやべりはここまでと言わんばかりに顔を寄せた。

「んっ」

杏子はさやかの唇をなぞるように舐め、軽く触れ合うだけの口づけをする。いつもの、始まる前の合図。たったそれだけで頭の中のスイッチが切り替わ



り、お互いのことしか考えられなくなる。杏子はさやかの口の隙間から舌を侵入させ、より一層深く口づけた。

「っう、」

ねじりこんだ舌は、口内を貪る。舌が絡め取られ、唾液をすすられた。さやかの中のすべてを持っていこうとする。舌を絡めあっていると、口の端からどちらのかわからない唾液がこぼれ落ちた。だけどそんなことを気にする余裕はない。

「んっ、あ」

「あ、ふあ……」

喘ぐように息が荒い。くちゆくちゆとした水音が部屋に響き、それがより一層お互いを興奮させた。唇を重ねたまま、杏子はさやかの体に触れる。頬に添えられていた手が徐々に下へ伸びていった。

「あっ、ん……！」

胸の敏感なところに触れたかと思うと、そつと離れて指先で円を描くようにくるくるとなでる。先端を指先でいじりながら、仰向けになっていてもそれなりに大きい乳房を揉みしだく。

ぶつくりと柔らかかった乳首は、次第につんと固くなる。その反応を楽しむように指で押しつぶし、口に含んで舌でころがした。

「……っ、んんっ！」

さやかは刺激に耐えられず、思わず声が漏れる。口からこぼれる嬌声は、触れられていない杏子の体も熱くさせる。

しっとりとして手に吸い付くような肌。柔らかくて、いいにおいがする。杏子は我慢できなくなつて、口を大きく開けさやかの乳房にかぶりついた。

「あああっ、んあっ！」

音を立てて、強く吸う。唇を離すと、さやかの白い肌に赤い痕が残った。

「な、に……？」

「ううん、なんでも」

その印を見て、杏子は満足そうに微笑む。自分のものだと、おっぴらに主張できる数少ない手段。見ているとほっとして、同時に少し切なくなった。頭を振って、目の前のさやかに集中する。

杏子はさやかの張り詰めた乳首を強めにひつかいてつまんだ。少し乱暴なくらいが、さやかにはちようどよい。何回も体を重ねて学んできた。それに、今日はいつともよりいいみたいだから。敏感に反応するさやかをもっと楽しませたくて、乳首に歯を立てる。こりこりとした感覚を楽しみ、より一層強く吸う。

「あ、うううんっ！」

止まらない刺激にさやかはのけぞり跳ねた。断続的に体が痙攣する。

「あ、ああ、んんあああああ！」

びくりと身体が大きく震え、ひときわ甲高い声が上がった。

「あ、ああ、ん……」

「さや、か……？」

「も、はあ……やだあ……」

「……もしかして、胸だけでイッた？」

「あなた……う、あ、言うなって……！」

「なんか、今日のさやかすごい、いやらしい……」

「はあ？んなの、しら……んんっ」

文句を言われる前に、杏子はさやかのショーツに手を伸ばす。触れただけでじつりと濡れているのがわかる。軽く押すと、ぐちゅぐちゅといやらしい音が響いた。



「ひっ、……も、あ……！」

「うん、脱がす、ね……」

もはや役割を果たしてないショーツを、するすると脱がせていく。覆うものがなくなり、とろとろと愛液があふれ出た。それはさやかの体をつたい、シートを重くさせる。

「あ、あ……」

濡れそぼった内側は愛液を垂れ流し、ひくひくと収縮を繰り返す。充血して、はやくはやくと求めている。

「はあ、見ん、なっ……！」

まじまじと見る杏子を咎めるように、さやかは力が入っていないこぶしで杏子の背中をばかばかとたたいた。

「ご、ごめん……でも、かわいい……」

「う、うううう、もう、はやく……」  
念のため、杏子は人差し指を口の中でしっかりと唾液に絡め濡らす。その間、さえ待ち遠しいといわんばかりに、さやかは腰を擦りつけてくる。

「待って、……いい、挿れるよ……」

涙と唾液によりくしゃくしゃになった顔でさやかは頷く。ゆっくりゆっくりと中へ侵入する。さやかの膣内は待ち望んだそれを悦ぶように締め上げた。

「う、あっ……！」

指を挿れると、杏子の体をぞくぞくとしたものが走った。もしこれが指ではなく自分に生えるモノだったら。考えるだけで頭がおかしくなりそうだ。同時に股間に感じる違和感。そろそろかもしれない。

「あっ！きょう、こ……！」

「はっ、あ……」

指の腹で押し上げ、前後にこする。

「うあっ、はあ、きょうこ、ああっ！」

さやかの甘えたような声が響く。きょうこ、きょうこ何度も繰り返す。

「きょう、んんっ……！」

指を曲げると、ぴったりと閉じていた膣内がぐちゃりといやらしい音を立てて開いた。中がほぐれてきたのが分かる。きつともう大丈夫だろう。

杏子が指を引き抜くと、べっとりとした愛液が垂れ落ちた。自分の愛撫でここまで濡れている。喜びとわずかな征服感。頭の中がどろどろにとろけていく。べとべとになった人差し指を見つめると、ふと杏子のショーツを圧迫する存在に気付いた。こちらの準備も整ったようだ。

「もう、いい……？」

下着をおろすと、杏子の股間から魔法で生えた男性器がそそり立っていた。

「……あ、はあ……うん、いいよ……」

期待とほんの少しの不安に瞳をうるわせ、さやかが求めてくる。少女の体には不釣り合いで、どこかグロテスクにも思える杏子のそれに優しく触れた。興奮して、もうすでに出ている透明の先走りの液体をさやかがすくう。

「すごい……」

その様子がとてもいやらしくて。いつものさやかではない、女を感じさせた。なにかが胸を締め付ける。こんなものをつけているせいか、それとも。不快な気分を振りはらうように、さやかの入り口にそれをあてがう。

「は、あっ……」

これからくるであろう衝撃を待ちわびるように、さやかの体がぶるりと震えた。その表情は普段よりもずっと美しくなまめかしく、ますます杏子の胸を苦しめる。勘違いかもしれない。だがふと場違いな考えを持った。

さやかは生やしてするときの方がいつもより楽しそうだ。反応がよく何度も達したり自分から触ったり、積極的な彼女が見られる。その行動はさやかが



求めているのは女同士ではなく、男だということの意味するのではないのか。そんなまさか。でも、最初からわかっていたはずだ。

だってさやかか魔法少女になったのは、あのぼうやのため。なのに今更。

「……さやかかって、こつちが好きなのか」

「ん、え……こつちって？」

「その、これがある方が」

言葉を濁した杏子は視線を自分の股間にあるモノへやる。

「やっぱり、さやかはさ」

男の方がいいのか、という言葉をすんでのところで飲み込む。認めたくなかった。声に出したら、すべてを失ってしまいそうな気がした。どうやっても性別はひっくりかえせない。こんな、魔法でも使ってごまかすしかない。どうあがいても、自分は少女のまま。

なかなか先へ進まない杏子に、焦らされているのかとさやかが顔を上げる。

またあのいたずらっぽい顔で、変なことを考えているのでは。もしかしていやらしい言葉でも言わされるのか。

杏子の顔を覗き込む。しかし目にとびこんできたのは予想に反して、不安に

押しつぶされそうな、迷子の子供みtainな姿の杏子だった。

「……きょうこ？どうしたの、」

「だって、だって、さやか楽しそう……」

杏子は乱暴に髪をかきむしる。自分で言ったこととはいえ無性に腹が立つ。

さらにもとはと言えば、自分が気まぐれで生やしたことが原因だ。ぎゅつと

下唇を噛んで、気を抜けば漏れてしまいそうな情けない声を押し殺した。

「楽しそうって、うーん。そうかなあ……」

「……やけに、積極的だし」

さやかは荒い息を整えながら思案する。さきほどまで自分を貪っていた恋人

が、途端にしよんぼりと落ち込んでいる。急にどうして。原因は、なにか。

もしかして、自分だろうか。多少うぬぼれているかもしれないけど、こう

やって彼女の気持ちや左右させるのは、いつも自分だと思っから。熱に浮か

されていた頭に喝を入れて考え込む。

「うーん。……強いて言うなら、って感じだけど」

しかし、単に謝っただけでは、こうなった杏子には伝わりそうにない。さや

かは杏子の背中に回っていた両腕をはずし、杏子の乱れた髪を直してやる。

「それがあつたら、こうやって杏子の顔がちゃんと見えるし」

汗で濡れた頬を両手でぎゅつと挟んだ。今にも泣きそうなほどこわばってい

た杏子の顔が、ぐにやりとゆがめられる。

「な、なにひゅんだ」

「いいからいいから。それにね」

そのまま頬から顎を撫でおろし、這わすように首、肩、腕に触れ、最後にさ

やかの顔の横に置かれている杏子の手に重ねた。

「手が、つなげるよ」

ほらね、と杏子の指の間にさやかの指が入り込む。ぎゅつと絡まる手と手。

不安に揺れる杏子の瞳が、はっと大きくなった。繋がれた指先からじわりと

暖かいものが広がる。

「なんか安心するんだ。杏子が、ここにいてるって実感できて」

「……んだよ、それ」

さやかの言葉がどうしようもなく杏子の胸を満たす。心にのしかかっていた

ものを取り除いてくれる。大丈夫だと、言ってくれるような気がした。自分

の居場所はここにあるのだと、教えてくれたような気がした。

「ばか、ばか……さやかのあほ」

「そんな、目をうるうるさせて言っても迫力ないわよ」



「うるさい、ばか。ばかさやか」

「……はいはい、わかったから——あ」

急に固まったさやかを見て、どうしたのかと杏子はさやかの視線を追う。そこには、先ほどよりも大きさを増した立派なうんまい棒があった。

「……う、わー……」

「わー……」

「……なにか言いなさいよ」

「え、え、つと……ごめん？」

さっきまでべそをかいて半泣きだったのに。途端に嬉しそうな申し訳なさそうな、複雑な顔になる。

「う、う、……だいたい、さやかが悪い！」

「は？」

「さやかが今日に限ってすごくかわいいからいけないんだ！」

「な、なに言って……！」

「うるさいっ、ばか！さやかのばか！」

まだなにかを言おうとするさやかの口をふさぐ。そのまま腰を前に突き出して、入口から挿れようとする。

「……んっ！」

肉棒と秘所がこすれ合い、途端に切なげな声が漏れた。どちらも、中途半端なところで止まっていたのだ。求めているのは、お互い同じだった。大丈夫か、と杏子が目でうかがってくる。それにこたえるように、さやかは杏子の唇にかぶりついた。

その様子を確認してゆっくりと中へ侵入する。しっかりとほぐしてはいたが、それでも杏子しか知らないさやかの中は、異物をみっちり締め押し返そうとする。

「あ、……中……すごっ……！」

「あ、んああっ！」

少しずつ奥へ奥へと入る。その間も内壁がぎゅうぎゅうに杏子の肉棒を締め付けた。その感覚だけで、達してしまいそうになる。何度もその甘い誘惑に負けそうになりながら、こつんと一番奥にぶつかった。

「さや、かあ……はいっ、た……」

「んん、……う、ん……」

息も絶え絶えに、言葉を交わす。少し動くだけでこらえきれないほどの刺激がやってくる。大きく息を吸って、今度は腰をゆくりと引いた。押し返しながら、しかし繋ぎ止めようと圧迫する膣内の動きが、杏子の体を震わせる。

「うごく、ね……」

「んうっ、ふ、あ」

緩やかな律動を始める。前後に動く、体が全部溶けてしまいそうな感覚に陥った。ぬるぬると内壁が絡みついてくる。少しでも長くさやかを感じたい。奥菌をぎゅゅと噛み、快楽にのまれそうになるのをこらえた。

「はっ、はああっ！」

汗が、体液が、腰を打ち付けるたび体にはりつく。だけど不思議と嫌だとは思わなかった。むしろ感じているのは一緒なんだと、うれしく思えた。

繋がった体が、決して離れようとしめない。さやかの手が、杏子の手がお互いを痛いぐらいに握りしめる。大好きだ。愛しい。離したくない。ただ一心不乱に腰を打ち付ける。

どれくらい時間がたったのか。ふと、さやかの声が聞こえないことに気付いた。夢中になっていた動きを止めて、体を離す。もしかして、気絶していたなんてことはないだろうか。前科はある。心配になって、顔を覗き込んだ。

「……っ……うっ……！」